

サッカーワールドカップで熱戦を繰り広げた日本代表の活躍や感動の余韻が残りますが、この夏、多久市からも日本代表選手として世界大会に挑む中・高校生がいます。それは、クライミングの樋口純裕さん（佐賀北高3年）と、硬式野球の武富章剛さん（中央中1年）。強化合宿や遠征を前に、練習に励む2人を訪ね、これまでの道のりや抱負などを尋ねました。指導者のお話から代表にふさわしい素質や向上心が伺える2人です。

東多久町の樋口純裕さんが高校生最後の夏、クライミングの国際大会に挑むのは8月28・29日の『2010ワールドカップ韓国大会』と9月上旬にイギリスで開催予定の『ワールドユース選手権』。共に権威ある大会で、男子リードの部に出場します。ワールドカップは一般選手（20歳以上）に交じって初出場した昨年の世界選手権（中国）に続く挑戦で、6月に行われた第24回リードジャパンカップ千葉大会の好成績による強豪国日本の代表選手入り。遠征前にも国内の競技会に参戦しながら練習、合宿を積んで、世界一を狙います。

出会いは2、3歳の頃

純裕さんは、学業と両立しながら、国内外屈指の大会に飛び回り、名を刻んでいるスポーツクライミング選手です。手足の指先一点に全神経を集中させ、傾斜した壁の完登を目指すクライミングの競技種目には、ロープなしで約5mの人工壁を登る『ボルダリング』や、12m以上の高さがある人工壁を命綱を体にくくり、自らがルート途中の確保支点にそのロープを通して登る『リード』などがあり、純裕さんが得意とするのはリード競技。スタート前6分間でルートを描き、制限時間（6分前後）内にイメージ通りに頂上まで到達するという頭と体力を使う競技です。

クライミングとの出会いは、2、3歳の頃。当時も多久高登山部顧問をしていた父・義朗さんの影響で、純裕さんは「遊びで親しんでいたのがきっかけで、小学生の頃は柔道や水泳もやっていましたが、体格に合うクライミングを選択し、中学で本格的に始めました」と。以来、県内唯一人工壁の練習場がある多久高で、練習を積んでいます。

中学3年で国際大会準優勝

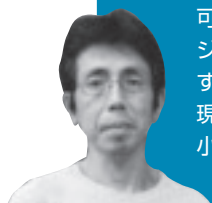
懸垂や腹筋など筋力強化トレーニングも欠かさず、壁を登ることを体で覚え、国内大会にデビューした中学1年の夏、富山県でのジュニアオリンピック（アンダーユースBの部）で準優勝。以降は、めきめきと頭角を現し、中学3年の夏には、南米エクアドルで開かれたワールドユース選手権で国際大会初参戦し準優勝。高校進学後も何戦もある国内外の大会に飛び回り、経験を積み、優れたボディバランスを武器に、ユース世代では国内トップレベルをキープしています。一般選手に交じった大会にも出場し、スポンサーもつくほど成長した姿に義朗さんは「中学生から育てた選手は私自身初めてで、中学生で高校生並みの練習量をこなしていたし、その積み重ねと精神力の鍛錬に合わせ、強化選手として合宿で鍛えられたのも大きい。それに、私の教え子たちが九州のクライミングを牽引する活躍を現在もしているので、汗を共にした先輩やそれ以前に、練習する壁もなく試行錯誤して、力を付けていった先輩の影響もあるでしょう」と話し、親として、指導者として、今も支える立場です。

プロのクライマーが夢

父の支えに深く感謝する純裕さんは、多くの場を踏んで学んだことを義朗さんにも伝え、新しい時代にふさわしいトレーニングのあり方にも野心を示します。そして、「やってみたことで自分に合う競技だと確信し続けて、いい成績も残せてきたが、それを維持していくのは簡単ではない。世界大会となると、もっと体力が必要だし、韓国のワールドカップは前年のリベンジでもあり、自分の本気がどれくらいなのかを確かめる大会でもある。まずは、自分自身との戦いに集中し、ワールドカップで優勝したい。そして、大学受験後もクライミングを続け、プロのクライマーが夢です」と、まっすぐな目で将来を見つめ、クライマー人生への道を描いていました。

樋口監督メッセージ

練習量は嘘をつかない。不可能を可能に！壁を前に否定することなく、可能性に向かってチャレンジしてほしい。（日本を代表するような指導者の監督は現在、スタートが肝心と！小学生の指導にも熱心です）



ガンバレ！
ひぐち まさひろ
樋口 純裕 さん
（佐賀北高3年・多久町）

■週に4～5日、2～3時間トレーニングすると言う多久高にある高さ約12m、幅8mのウォール（壁）で、ルートを確認しながら、ホールド（突起物）をつかんで、上へと登る練習をする純裕さん。監督とつながる落下に備えたロープは、太い絆のよう